

珠玉の長期症例から学ぶ！

保定管理や咬合の安定性、Angle class II, IIIや叢生、過蓋咬合、開咬などの不正咬合への対応、成長予測の限界 etc……

矯正治療の 長期経過と保定管理

不正咬合へのアプローチと長期予後からの示唆

小坂 肇 著

本書の第10章では先生が多くの症例を経験し、その結果それぞれの症例の特性を認め、それを受容することの必要性を述べています。このことは矯正治療のみならず、他の治療にも言えることで、また大きく捉えれば、人それぞれの人生の有り方にも通じる、たいへん大きな示唆だと思います。

長く研究・治療を続けることによって新たな成果が生まれます。本書は若い研究者のみならず、まだ臨床教育を受けていない歯科学学生にも、ぜひ読んでいただきたい1冊です。

(東京歯科大学理事長・井出吉信先生ご執筆、推薦のことばより一部抜粋)

本書の構想の背景には、欧米の理論を無批判に受け入れるのではなく、人種ごとの骨格や筋、歯列など、その特徴に即した矯正治療を、不正咬合で苦しむ患者に提供したいという信念があった。(中略)長年にわたり積み重ねた症例の記録と検討は、単なる診療の延長ではなく、臨床家にとって未来を見据えた実践的指針となると確信している。(本書のおわりにより一部抜粋)

矯正治療の 長期経過と保定管理

不正咬合へのアプローチと長期予後からの示唆



小坂 肇 著

QUINTESSENCE PUBLISHING
クインテッセンス出版株式会社

最長30年、平均16年6か月、数多くの長期経過症例を掲載。

矯正治療後の安定を見据えた診断・治療計画の重要性を学べる、矯正医必携の実践的専門書、誕生！



第1章 長期経過症例を検討するにあたって

- 1-1：長期経過症例を検討するうえで認識しておきたい要素
- 1-2：「Ricketts 分析」とその概要
- 1-3：下顎の評価方法を知る
- 1-4：下顎智歯が歯列に与える影響
- 1-5：矯正治療における顎顔面成長への対応方法
- 1-6：長期症例を検討していくうえでポイントとなる要素

第2章 矯正治療における機能咬合の問題

- 2-1：保定や咬合の安定に必要な機能咬合とは？
- 2-2：筆者が当時（1970年代）に機能咬合を目指した症例
- 2-3：大白歯部の咬合力が下顎前歯部の不正排列に与える影響について
- 2-4：保定と機能咬合の問題についての総括

第3章 矯正治療後の保定と咬合の長期安定性について

- 3-1：“矯正治療後（保定時）に起こる問題”へと対応するために必要な視点とは？
- 3-2：矯正治療における保定の位置づけと長期経過観察の重要性
- 3-3：初診時診断資料の注意深い検討は、保定および保定後に結び付く

参考症例 初診時～保定後までステップで追う臼歯関係 class II の症例

- 3-4：動的治療終了と保定開始についての説明と管理責任
- 3-5：保定中に起こる咬合変化に及ぼす要因について
- 3-6：咬合の長期安定性と一般的保定期間の問題
- 3-7：保定後の長期経過に認められる咬合の不安定性
- 3-8：治療前後、および長期経過における咬合推移とその対応

第4章 Angle class II への対応と長期経過

- 4-1：Angle class II 症例の治療検討に際して——本当に“上顎前突”か？

第1症例 長期経過中、十分な下顎成長が得られなかった成長期 class II 1 類の過蓋咬合症例

- 4-2：成長予測の限界と長期観察の重要性

第2症例 矯正治療中に著しい下顎の後下方成長を示し、一時治療休止した成長期の class II 1 類症例

- 4-3：成長期における特異な成長と向き合う矯正治療の実際

第3症例 矯正治療後、長期経過時に下顎の著しい変則成長を示した症例

- 4-4：Angle class II 症例にみられる、予期しがたい成長に苦慮しないための考え方

第5章 Angle class III 下顎前突症例への対応と長期経過

- 5-1：下顎前突症への対応についての歴史
- 5-2：外科的矯正治療を希望しない骨格性 class III 患者に対する、class III finish による治療の概要

第1症例 治療中下顎成長が認められ、抜歯空隙が残留した成長期の強い骨格 class III 症例

第2症例 著しく前方発達した下顎骨と上顎骨の low Angle class III 症例

第3症例 下顎の晩期成長が認められた class III 成人過蓋咬合症例

第4症例 学童期の強い class III 治療完了後、思春期成長により

外科的矯正に至った症例

- 5-3：骨格性 class III の下顎前突症例の問題点とその対応の一考察

第6章 叢生への対応と長期経過

- 6-1：叢生の治療と治療後経過の検討について

- 6-2：叢生をともなった3症例の検討

第1症例 成長期非抜歯拡大治療後、成人期に著しい叢生を発現し、抜歯治療に至った症例

第2症例 成長期に便宜抜歯による治療後、成人期に4本の智歯が完全萌出し、著しい叢生を発現した症例

第3症例 成長期に便宜抜歯による治療後、成人期に著しい叢生を発現した、強度の矮小顎症例

- 6-3：保定後になぜ下顎前歯部に relapse（後戻り）や新たな不正が起こりやすいのか？

——下顎前歯部7つの特性とそれによって受ける影響

第7章 過蓋咬合への対応と長期経過

- 7-1：過蓋咬合症例の治療検討に際して

- 7-2：過蓋咬合症例と咀嚼筋の関係

第1症例 著しい前歯舌側傾斜をともなった成人患者の過蓋咬合症例

第2症例 成人患者による著しく深い前歯垂直被蓋と舌側傾斜の class II 2 類過蓋咬合症例

第3症例 成長期の骨格性過蓋咬合で強い咀嚼筋の影響が考えられた症例

- 7-3：強い筋力には抗えない

第8章 開咬症例への対応と長期経過

- 8-1：開咬症例の治療に際して認識しておきたいこと

- 8-2：開咬症例4例の検証について——特異な問題を抱えた症例への対応

第1症例 下顎の左方偏位をともなう骨格不正と、著しい開咬状態をともなった症例

第2症例 臼歯部歯冠高径に問題のある著しい骨格性開咬症例

第3症例 強い舌の影響が考えられる前歯部開咬症例

- 8-3：長期安定性のために必要な治療視点と初期対応の重要性

第4症例 欠損歯を有し、後下方後退および右方偏位をともなう下顎の強い骨格性開咬症例

- 8-4：開咬症例における咀嚼筋の脆弱性を改善するには？

- 8-5：難しい開咬症例の長期安定性を確保するために

第9章 保定装置の役割とその必要性

- 9-1：保定装置の必要性——歯科矯正治療における保定装置の位置付けについて

- 9-2：一般的に用いられている保定装置の動向

- 9-3：症例に応じた保定装置の対応とその種類

- 9-4：Fixed retainer に関して

第1症例 Fixed retainer を使用した症例

第10章 保定問題の総括と今後への展望

- 10-1：保定問題の総括

- 10-2：次世代へのメッセージ

きりとり線

注文書

矯正治療の長期経過と保定管理

モリタ商品コード:208041050

冊注文します。

●お名前	●貴院名	●ご指定歯科商店
●ご住所 (〒)		
●TEL	●FAX	
		支店・営業所

※ご記入いただいた個人情報は、弊社の新刊案内、講演会等の案内に利用させていただきます。
※ご指定歯科商店がない場合は送料をいただき、代金引換宅配便でお送り致します。